

## まぶ池の人柱

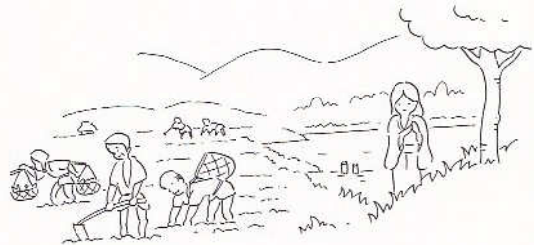
昔のことじゃ。「まぶ池」の土手が崩れたことがあるんじゃ。安芸の国の中でも指折りの大池の土手が崩れたんじゃけん、大事じゃ。野武士の谷を流れた水は、宇山の谷を流れて家や田畑を押し流したんじゃ。もともと池の水は宇山側へ流れる地形の池なんじゃが、高い土手を築いて小田村の方へも水が流れるようにしたところから「間夫池」「魔婦池」と呼ばれるようになったそうじゃ。

宇山の田畑はみんなの協力で立派にもとどおりになったんじゃが、土手が崩れたままで小田村へは水は流れてこんのじゃ。「早う土手をなおさんと田が作られん」小田のもんは困って、宇山側へ「土手を作らせてくれ」と、頼んだんじゃ。宇山の庄屋は「あがあな危ない土手を造ることはやめてくれ」と、言っただうしてもきいてくれんかった。「そこをなんとか。水が流れんと、生きてはいけん。どんな条件でもきくから」と、申し入れたんじゃそうな。

宇山の庄屋も、「そんなに言うんなら、土手を築く時に、十四、五歳くらいの娘さんを人柱にたてることできるんなら」と、いうたんじゃけな。宇山の庄屋は、「こんなひどい条件なら小田のもんも、あきらめるんじやろうと思うとったんじゃ。」

小田村でもいろいろ相談をしんかったが、米をつくっていくためには、その条件をのむより仕方がなからうということになったんじゃ。人の命とひきかえに、しかも若い娘ということはおむごい話じゃった。その娘さんは小田村の恩人として、比久尼堂というお堂にまつられて大事に伝えられてきたんじゃ。

尊い命を犠牲にして築かれた土手は、今でも満々と水をたたえておるんじゃ。だけのお、比久尼のお堂は荒れ果てて行き、今では忘れられてしもうて、草木に埋もれとるんじゃ。悲しいことよのお。



## 將軍社（牛頭社）

堤大地にも人柱の話はあるんじゃ。池の修理をする時にや。生きた人を埋めて、人柱として土手の安全を祈ったと伝えられてある。しかしのお、あまりにも悲しゅうてむごい話じゃからいい方法はないものかと、いろいろ相談をしたそうじゃ。そのあげく人間のかわりに、生きた牛を身がわりにすることにしたんじやと。この牛が「牛頭社」として堤大池の守り神となつとるんじや。また、こういう話もあるんじや。

昔、堤の大池がつくられた時の話じゃ。大きな工事でお、多くの百姓と長い長い時間がかかって大変苦労して堤を造つたんじや。

そんな難工事の中で、人々がホツと心を安めることがあったんのお。ふしぎな事に、小高い岩の上に一羽の白い鳥がいつも止まつてのお。皆んなを励ましておるように見えたんじや。汗水流して体はくたくたになつてもその白い鳥を見るとのお。何故だか身も軽うなつたよう、みんなは「ありがたい。ありがたい。」と言つておつた。大きな事故もなく完成した堤に水が満杯となつて、人々が祝いの席へ集う頃、その白い鳥はいずともなく飛び去つて、再び帰つてこなかったんじや。

それから誰言うこともなく、この堤大池の守り神として、その白い鳥がいつも止まつておつた石を、ご神体としてお祭りするようになったんじや。「白鳥社」とも言われておるのが、そのいわれなんじや。

